

『秘密の純真オメガと溺愛王』

著：名倉和希

ill：蓮川 愛

膝丈まで伸びた野菜の畑に、リリは水を撒いた。十五年前から使っているじょうろは穴だらけで、うまく持たないと自分の足が濡れる。雨水を溜めてある池と畑を何往復もして、水撒きを終えた。

「こういうとき、からだ小さいとふべんなんだよね」

ひとつ息をついて、自分用のじょうろと侍従たち用のものを見比べる。倍はある大きさのじょうろは水をいっぱいに入れるととても重くなり、五歳児の体格しか持たないリリには持ち上げられないのだ。そのせいで、池と畑の往復回数も倍になる。

「ああもう、疲れたよ」

汚れてもいい作業着姿のまま、石畳の隅にちょこんと座った。

じっとしていると離宮を囲む森の中から、にぎやかな鳥のさえずりが聞こえてくる。北の地もすっかり初夏だ。春の訪れとともに鳥たちは恋の季節を迎え、いまは孵った雛をせっせと育てている最中だろう。

サリオラが旅立ってから三カ月と少しがたった。畑に蒔いた種は芽吹き、種類によってはそろそろ花が咲くかもしれない。去年の春とおなじように種を蒔いてしまったが、このままサリオラが戻らなければ、リリだけでは食べきれないほどの収穫量になるだろう。

「……腐らせるのはもったいないから、冬にそなえてなんとか保存用に――」

そこまで考えて、リリの思考は停止した。ひとりで迎える冬は、いったいどれほど孤独なのだろうか。それを考えると怖くなる。ぎゅっと拳を握り、歯を食いしばった。

「だいじょうぶ、サリオラはきっと帰ってくる。としよりだから、時間がかかっているだけ。ぼくをひとりにしない。帰ってくる」

そう自分に言い聞かせなければ、心が折れてしまいそうだ。最悪の事態は想定したくない。

けれど頭の片隅では、サリオラはもうここに戻ってこられないのではないかと思っていた。

やっぱり引き留めればよかった。行かせなければよかった。いや、リリがどれほど言葉を尽くして引き留めても、サリオラの決意は翻らなかつただろう。あの男は本当に頑固で、忠誠心の塊のような侍従だった。ときには厳しく、ときには優しく、リリを愛して守ってくれた。

サリオラだけでなく、侍従たちはみんなリリによくしてくれた。きっとリリに献身的になってくれる侍従を、両親が厳選したのだろう。

「川で魚でも捕ってこようかな」

ぼうっとしていると余計なことを考えてしまう。忙しく体を動かしていれば、そのあいだだけ

でも忘れることができる。そう教えてくれたのはサリオラだ。

リリはいつも使っている網を持って、森の中の川へ行った。釣るよりも網を仕掛けた方が、効率がいいのは経験でわかっている。

森の中にはいく筋か小川が流れていて、離宮に一番近い川がリリの漁場だ。川幅は大人の背丈の倍くらいで、深さはリリの膝上くらい。これ以上深いとリリが流される。もう少し大きな川もあるが、そちらは侍従たちが行っていた。やはり大きな川の方が大きな魚が捕れる。

リリは川の中に網を張り、魚が掛かるまでのあいだに森を見て回った。

「ああ、ここももうダメだな」

目印の大木の下に半分埋めてあった水晶が、粉々に砕けていた。

母がリリと侍従に持たせた結界用の水晶が、ここ数年で朽ちてきていた。そう簡単に朽ちるはずのない水晶だが、やはり結界を保つために無理を強いられていたのだろう。六人の侍従とリリの分を合わせて七つあった水晶のうち、すでに半分以上の四つが砕け、土に還っている。

おそらくもう結界は解けている。だれでも入ってこられる状態ではないだろうか。

「……いまさら、こんなところにだれも来ないだろうけど」

あの戦争から十五年も経っている。たぶんプロムベルグ王国は人々から忘れ去られていて、ここに離宮があったことも王子がひとり逃げたことも、覚えている人はいないにちがいない。

かといって、たったひとりでここを出て行く勇気はなかった。

結界は解けても、リリの左手小指の指輪は抜けていない。リリはあいかかわらず五歳児の姿のまま。この体でどうやって働くというのか。心根の優しい大人に孤児として保護されたとしても、いつまでたっても体が大きくなりえないリリを不審がるだろう。

かといって、指輪が外れればすべてが解決するわけではない。

母は、リリのことをオメガだと断定していた。オメガには発情期がある。番のアルファにうなじを噛んでもらうまで、平安は訪れない――。

自分がオメガであることは幼いときから知っていたが、その特性については実年齢が十歳になったころ、サリオラから教えられた。

衝撃の内容だった。まさか男児だと思っていた自分が子を産めるなんて。発情期になるとだれかれかまわらずアルファ性の人間を誘ってしまうなんて。その結果の悲劇の数々を、サリオラは実例とともに話してくれた。

あのころ離宮での隠遁生活は五年を迎えていた。そろそろガイネス王国から迎えが来ると思って、サリオラはリリに性教育を施したのだろう。

オメガの宿命が恐ろしくて言葉もないリリに、サリオラは宥めるように言った。

「王妃殿下はリリ様を守るために、この指輪を授けたのです。王妃殿下のエルフの血に感謝いたしましょう」

母はエルフの末裔だった。わずかながら魔力があり、一人息子がオメガだと見抜いた。普通は思春期を迎えて発情期が訪れてからでないといけないとわからないらしい。リリは幸運だった。

「でもぼくには、母さまのちからはひとかけらもないんだよなあ」

リリは普通の人間だった父の血を濃く受け継いだようだ。黒髪黒瞳も父にそっくり。そもそもブルムベルグ王家の人間は黒髪黒瞳が特徴だったらしい。

川までぶらぶらと戻り、仕掛けた網を引き上げた。

「わ、たくさんとれた」

小魚ばかりだが十匹ほど網に掛かっていた。そのまま網にくるむように丸め、鼻歌まじりに離宮へ戻る。二匹ほどを焼いて夕食にしたら、あとは開いて干そう。頭と腸はゴミとともに土に埋めて、のちに畑の肥料にするのだ。

川から離れたとき、離宮の方から人の気配がすることに気づいた。

「えっ？」

複数の人の話し声と、馬の蹄の音？

流れる水の音のせいで聞こえなかったのだ。慌てて駆けていったリリは、数十人もの騎馬兵士が離宮を取り囲んでいるのを見て愕然とした。

「本当にこんなところに離宮があったな」

「おい、だれかいらないのか」

「これは畑なのか。だれか住んでいるのは確かなようだ」

数人の兵士が馬を下り、離宮の中へと入っていった。なめした革の鎧をつけた兵士たちは身だしなみに乱れたところはなく、背筋を伸ばして騎乗している。訓練された正規の兵士だろう。

リリは突然の出来事に、立ち竦んだまま動けない。

「中にはだれもいないようだ」

「どこかに隠れているのかもしれない」

建物から出てきた兵士が報告している。

戸締まりなどしていないから中に入られたとしても文句は言えないかもしれないが、大切な我が家に勝手に立ち入られた不快感に腹が立ってきた。なにか言ってやろうかと一歩を踏み出したときだった。

「そこの子供、おまえは森に住むものか？」

思いがけない方向から声をかけられ、リリはびっくりして飛び上がった。いつのまにこんなに近くに来ていたのか、馬の足がリリのすぐ横にあった。黒毛の立派な馬だ。見上げると、騎乗していたのは白銀にちかい金色の髪をした大きな男だった。

男はひらりと馬から下り、リリに歩み寄ってきた。かなりの長身で肩幅が広く、がっしりとした体つきだ。ほかの騎馬兵士たちとは作りがちがう革鎧を身につけている。一目で、上級の男だとわかった。

騎馬兵士たちの大将かもしれない。革鎧はこの男の体に合わせて職人が丁寧に誂えた高級品だし、腰に佩いている剣の装飾も見事だ。派手ではないが非常に凝っている。

周囲の兵士たちは、静止してこちらに注目していた。

男は膝を折ると、リリに視線を合わせてくる。

「ここに二十歳くらいの青年が住んでいるはずなのだが、知らないか？」

男は緑色の瞳をしていた。こんなにきれいな瞳を見たのははじめてで、リリはつい見惚れた。

「……きれいなみどり……」

無意識のうちにこぼれたつぶやきに、男は意表をつかれたような顔をしたあと、笑った。太陽のような笑顔だと思った。目も鼻も口も大きくて、笑顔は豪快だ。けれどどことなく品があって、粗野ではない。

「俺の瞳のことか？ それはありがとう。おまえもきれいな黒い瞳をしているな。髪も混じりけのない漆黒で、とてもきれいだ」

褒められた。髪と瞳を褒められたのははじめてで、リリはあまりのことに呆然としてしまった。喜びは、じわじわと湧いてくる。リリの黒髪黒瞳は侍従たちにとってあたりまえすぎて、話題になったこともなかった。

「なにを持っているんだ？ 網か？」

「川で、魚をとってて……」

「ああ、なるほど。おまえは川で捕った魚を離宮まで売りに来たのか。いつもそうやって商売をしているのか？」

「や、ちが……、ぼくは、その、ここに住んでて……」

「住んでいる？」

いぶかしげな表情になった男に、リリはハッとして口をつぐんだ。

この騎馬兵士たちがどこのだれかわからない。まだ自分の身分は明かさない方がいいのではないか。とっさにリリはそう判断した。

「おまえはいくつだ？」

「……五歳」

「親は？」

「いない」

そうか、と男が頷く。そこにすらりとした男が現われた。蜂蜜のような金髪で碧眼。こちらも高級そうな革鎧を身に纏っている。しかし目の前の男よりは落ちるだろうか。

「ヒューゴ、どうだった？」

大将らしき男に呼ばれた碧眼の男は、ゆるゆると首を左右に振った。ヒューゴという名前らしい。

「建物の中をくまなく探しましたが、人の姿は発見できませんでした。その子は？」

「ここに住んでいるらしい」

「えっ？ どういうことですか？」

「五歳だそう。親はいないと言っているが、王子の世話をしていた侍従の身内かもしれない」

王子、という言葉にリリは魚が入った網を落とした。震える手で男の鎧に縋りつく。

まさか、この男たちはガイネス王国から来たのか。サリオラが王都にたどり着き、リリのことを聞いて、わざわざ隊列を組んで迎えに来てくれたのか？

そうだとしたら、サリオラは生きている。

「ねえ……サリオラに、会ったの？」

「おまえ、やはりサリオラの身内か」

「サリオラはどこに？ 生きているの？」

「生きている。苦難の長旅の末に王都ミューラにたどり着いた。いま療養させている」

生きていた。サリオラは生きていた。リリの大切な侍従は生きていたのだ。ちゃんと目的地に着いたのだ。

安堵のあまりリリは地面にへたりこんだ。じわりと目が熱くなってくる。

「よ、よかった……生きてた……死んでなかった……」

サリオラの顔を思い出したら、涙があふれてきた。ぼろぼろとこぼれ落ちてくる涙を両手で拭いたが、作業服の袖口がびしょ濡れになってもまだ涙がとまらない。

「心配していたんだな」

大将がリリを抱きしめてくれた。そのままひょいと抱き上げられる。

「わあっ」

驚いて涙がとまった。経験したことがない高さから周囲を見下ろすことになり、リリはしばし呆然とする。大将は見た目よりもずっと屈強な体の持ち主のようで、リリを片腕に座らせるようにして歩き出した。あまりにも軽々と運ばれてしまう。

「サリオラは安全な場所で療養しているから、もう心配しなくていい」

「りょうよう……。具合がわるいの？」

「年寄りには過酷な旅だったのだろう。俺が出会ったとき、かなり衰弱していた。医師に診せたところ、一夏は療養するようにと言われた」

「ひとなつ」

くりかえすリリを見て、大将が微笑む。至近距離で魅力的な笑顔を向けられ、リリはドキリとした。抱っこされているのが恥ずかしくなってくる。下ろしてほしいと言ったら、きっとすぐに地面に下ろしてくれるだろう。けれどなんとなく、このまま抱っこされていたかった。

（ぼくはいま五歳の姿なんだから、すこしくらい、いいよね……）

この十五年間、だれにも甘えられなかった。侍従たちは過不足なく世話をしてくれ、家族同然の生活をしていても、厳密には家族ではない。主従だった。こんなふうに抱っこしてくれる侍従はいなかった。

（父さまよりも、このひと、おっきい）

王子だったリリに親しく触れ、抱き上げることができたのは両親だけだった。かすかな記憶にある父よりも、この男の方がはるかに頑健な体躯だ。

逞しい肩に寄りかかり、首に顔を向けてみる。ふわっといい匂いがした。甘いような、香ばしいような、安心できるような、そわそわするような——もっと嗅ぎたくなる匂い。

「きれいな指輪をしているな」

男がリリの左手小指の指輪に気づいた。まじまじと凝視されて、そっと右手で左手を包む。

「母さまのかたみ」

「そうか。おまえ、名はなんという」

「リリ……」

「かわいらしい名だな」

また微笑みかけられ、胸のどこかがキュンとした。

「えっと、じゃあ、みんな……ガイネス王国の、人なの……？」

ちょっとうっとりしながら聞いてみる。リリはこの男を、早くも信用しはじめていた。こんなに心地いい匂いをさせている人が、悪い人のはずがない。

「サリオラに聞いて、俺たちはこの離宮にやって来た。おまえ、ここで侍従とともに王子の世話をしているのだから？ 呼んできてくれないか。どこかに隠れているのではないか？」

「……王子を迎えにきたの？」

「そうだ」

リリは凭れていた頭をよいしょと起こし、緑色の瞳を見つめた。

「あなたは、だれ？」

「俺はユージーン・ガイネス。ガイネス王国の国王だ」

言い切った男を、リリは目を丸くして見つめた。

「……うそ……」

ガイネス王国の国王がこんなに若いはずがない。父よりも年上だったはずだ。そう聞いていた。それに大国の王が、こんな僻地までわざわざ来るはずがない。リリがなにも知らない子供だと侮って、この男は平然と嘘をついたのだ。

信用しようと思っていたところだったので、リリは衝撃を受けた。腹が立って、「おろして！」とジタバタもがいた。すぐに地面に下ろされる。リリは一目散に離宮の中に駆けこんだ。

「おい、どこへ行く。王子は？」

声を無視して建物の奥へと駆けていく。兵士たちが内部をザッと見て回ったようだが、この離宮はそれだけでは把握しきれない複雑な造りになっていた。リリひとりが隠れられる場所ならいくらでもあるのだ。

リリは外の様子がうかがえる場所に身を潜め、隙間から兵士たちを盗み見た。王と名乗った男——ユージーンはリリを追いかけては来なかった。困ったように立ち尽くし、ヒューゴと呼んだ男と立ち話をしているのが見える。なにを話しているのだろう。

不意にリリは思い出した。そういえば、ユージーンは最初に王子のことをリリに尋ねたとき、「二十歳くらいの青年」と言わなかったか？

本当にあの男はサリオラと会い、十五年前の約束を聞いたのだろうか。聞いたとしたら、なぜ王子に魔法がかかっていて五歳児の姿だと知らないのか。

もしサリオラと会ったことも嘘だったらどうしよう、とリリはうろたえた。生きてると安堵していたのに、サリオラになにかあって隠し持っていた手紙だけが王都に届いたのだとしたら——。不安のあまり嫌な感じで心臓がドキドキする。

やがて兵士たちは離宮と森のあいだに天幕を張りはじめた。そして地面にレンガを組み簡易竈

を作ると火を熾し、煮炊きをはじめた。彼らはここで夜を明かすつもりなのだろうか。

ユージーンは一番大きな天幕に入り、出てきたときには革鎧を脱いでいた。剣も置いてきたのか丸腰で、薄手のシャツ一枚になっている。肩や胸の盛り上がった筋肉が、羨ましいほどだ。

「おーい、リリ、出てこいよ」

こちらに呼びかけてきた。

「おまえが捕った魚でスープを作ろうと思うんだが、いっしょに食べないか」

あっ、と声を上げそうになった。網といっしょに魚を落としたのだった。今夜の食事にしようと思っていたのに。

「おーい、リリ、おまえが捕った魚だろう。食べようぜ」

勝手に盗んでおいて、なんて言い方だ。リリはぐっと歯を食いしばって我慢した。お腹が鳴りそうなほど空腹になってきていたが、無視した。リリが呼びかけに反応しないしていると、ユージーンは諦めたのか天幕へと戻ってしまう。腹と心が切なくて、リリは泣きたくなった。

隠れていた場所からそろりと出て、こそこそと厨房へ行く。火を使ったら居場所がバレるので、干し肉を嚙りながら水を飲み、飢えをごまかした。

「こんやは、やねうらで寝よう……」

いつもの自分の部屋では寝られない。場所と家具調度品で王子の部屋と特定されているだろうから。

厨房を使えないのとおなじ理由で燭台も使えない。完全に日が暮れたら真っ暗だ。暗くなるまえに、埃っぽい屋根裏にシーツを敷き、持ちこんだ毛布にくるまった。

外から賑やかな談笑が聞こえてくる。彼らは兵士だろうが、ここは戦場ではない。気楽な雰囲気気が伝わってきて、ひとりでいた昨日までよりも寂しさが募った。食事に誘われたときに出ていたら、いまごろあの輪の中にいられたのだろうか。

ユージーンに抱き上げられたときの高揚感と、あの心地いい体臭が忘れられない。

リリはきつく目を閉じて、考えまいとした。けれど、ぜんぜんうまいかない。ユージーンはリリの頭の中から少しも追い出されてはくれなかった

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>